

青梅市文化財ニュース

第452号

令和7年6月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 Tel 0428-23-6859)

青梅市のコメ作り

令和7年に入ってから、米の値上がりのニュースや備蓄米の安価での放出等テレビや新聞に取り上げられない日がない程、米に関する話題がいっぱいです。そこで、青梅市のコメ作りについて書いてみたいと思います。

青梅市内の主な穀倉地域は、今寺の天皇塚田んぼと成木川と黒沢川が合流する付近に広がる富岡の乙黒^{おとぐろ}耕地です。天皇塚田んぼの水源は大門川（吹上菖蒲園が水源）で、霞川・成木川・多摩川等の河川と比べて水量は多くはありません。あとは霞川流域や小河川の谷戸と呼ばれるところに少し田んぼがあるくらいでしたが、今はその多くが埋め立てられて住宅地や畑になってしまい、コメ作りは行われなくなっていました。

私が住む野上町も、江戸時代の村明細帳には、「当村に田御座無く候」と書かれており、田んぼがなかったようで、幕末になってほんの少しだけ稲作が行われるようになりました。青梅市全体を見ても稲作はほんの少しだったようです。

それでは稲作の作業について述べてみたいと思います。

まず、春になって一番最初にするのが田起こしです。昔は人力や牛馬を使って行いましたが、現在は機械（トラクター等）で行うのがほとんどです。草の繁茂防止のために2～3回くらい耕運すると、防草にもなるし土の塊も細くなり、後の代掻^{しろか}きが楽になります。

その次が「堰普請^{せきぶしん}」です。河川に「堰」をかけて水が水路に流れ込むように水位を上げます。そして田んぼ迄の水路に溜まっている落ち葉や泥を掻き上げて、水が流れやすいようにします。田んぼに水が入るようになると、「くろ付け」と言って、畦畔から水漏れしないように、どろどろにした土で畦畔を塗り固めていきます（壁土と同じで、乾くと固くなり水漏れしにくくなる）。現在は手間の掛かるくろ付けの代わりに、ビニール製の漏水シートを使用します。

次に苗づくりですが、昔は田んぼの一部に「苗代^{なわしろ}」として、粃を蒔き、そこで苗を育てました（青梅辺りでは、5月初めから10日過ぎ頃に種をまくことが多い）。ですから田植えの時には専門で苗を取り、藁で縛って束にする役の人が必ず1人か2人必要でした。現在は、機械植えがほとんどなので、田植え機に対応するよう箱蒔き（土も専用の培養土を買って、機械でまく）にします。

6月になる頃には、苗もだいぶ育ってきて、そろそろ田植えの時期が近くなると、前述の「代掻き」（現代はトラクター等で）を行い、土をどろどろにします（昔は

「フネ」と言ってレーキのようなものを引いて代掻きをしたようです）。代掻きをした後は「ユンブリ」（とんぼ）で平らにならし、いよいよ田植えになります。4作ほどの間隔（幅25cm前後）でシュロ縄を張ってまっすぐに苗を植え、植えた苗の間には、目見当で苗を植えていきます。苗はあらかじめ万遍無く田んぼの中に束を投げ込んでおき、苗が無くなったら、近くにある苗を取って植えます。これは、苗を取りに行く時間ロスの削減と、余分に歩くとせっかく平らにならした圃場を足跡で凸凹にしてしまうからです。こうして昔の田植え（手植え）は終わりますが、現在では写真のような機械植えがほとんどです。米どころのような所では効率を上げるため、8条植え等の一度に沢山の苗を植えられる機械が使われています。この機械植えも必ず苗が植えられるというわけではなく、機械の爪が苗をひっかけない時があるため、所々に植えムラが生じます。そういう所は人が歩きながら補植をしています。

田植えが終わると、あとは水の管理です。これは毎日行うもので、朝夕の水の入量をその時の天候等によって調節します。例えば気温が低い時は水の入量を多くする等、水の管理が大切です。

他にも草取り（畑の草取りは草を取っていきますが、田んぼの草取りはとった草を土の中に埋め込んでいきます。こうすることによって稲の肥料にもなります）や追肥、畦草刈り等多くの手間が必要となります。最近では、除草剤を使用する所が多いようで、田んぼの草取りをしている姿はほとんど見かけなくなりました。

土用の頃には、何日か田んぼへの入水をやめ、田を干します。その後8月下旬頃になると花が咲き始めますので、入水を多目に行います。そして、秋の彼岸近くなると稲穂も垂れ下がってくるので、もう水はいらなくなります。

稲穂が頭を垂れ黄金色になると稲刈りです。稲刈りの後は「稲架掛け^{はさ}」で、天日干しを半月ほどした後脱穀をします（コンバインでは稲刈りから脱穀までをいっぺんに行い、集荷サイトの中で乾燥や貯蔵をコンピュータ管理で行う）。その後に粃摺り、精米となって食べられるようになります。正に八十八の手間をかけて作られるのが「米」であり、種蒔き機、田植え機、刈取り機、脱穀機、粃摺り機、精米機と多くの機械も必要なので、大規模化しないと採算が合わないため、コメ作りをやめる農家が多くなるのだと思います。いずれにせよ市場にお米が沢山出回り、買いやすくなるといいですね。（文責 神森 正）



機械植えの様子



手植えの様子